



Title	サマルカンド市所在グリ・アミール廟出土の織物について
Author(s)	村上, 智見
Citation	日本中央アジア学会報, 15, 100-102
Issue Date	2019-07-31
DOI	10.14943/jacas.15.100
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88371
Type	article
File Information	JB015_011murakami.pdf



[Instructions for use](#)

サマルカンド市所在グリ・アミール廟出土の織物について

村上 智見

1. はじめに

本報告では、ウズベキスタン共和国科学アカデミーサマルカンド考古学研究所（以下、サマルカンド考古学研究所）に保管されているグリ・アミール廟出土織物を詳細に調査し織技を明らかにするとともに、発掘当時の中間報告書の記述について検証することで、ティムール朝期における染織文化の一端を明らかにしたい。

2. グリ・アミール廟発掘調査の概要

グリ・アミール廟は、ティムールの孫ムハンマド・スルタン(1403年没)の廟として建設され1405年に完成した。1941年6月19日、旧ソ連の学者らによる発掘調査で、ティムール、ムハンマド・スルタン、ウルグベク、シャー・ルフの棺から人骨と共に織物が出土した。資料にはエルミタージュ美術館の保存科学者である V・コノノフ(V. N. Kononov)作成の中間報告書とメモが添付されており、織物はナヴォイ博物館に引き渡されたとあるが、発掘当時に一部がサマルカンドに残されたものとみられる。

3. 中間報告書の記述

(1)ティムールの棺

棺覆布と見られる全長約 2 m の織物が木棺蓋上から出土。

①上部の布

文 様：縞文様。25cm 幅に、黒 2 cm、金糸 2 cm、黒地に金文様 4.6cm、黒字に金糸文字 8.5 cm、黒 2cm。

織密度：1 cm に経糸 5～6 ペア、経糸径 0.500 mm。緯糸 15～16 ペアの撚糸、糸径 0.25 mm 以上。撚絹糸に幅 0.300 mm、厚さ 0.005 mm の鍍金平銀糸を左から右にらせん状に巻く。

②下部の布

文 様：無色の平織り。

織密度：経糸 12、緯糸 20ペア。糸径は経糸 0.6mm、緯糸 0.1～0.4mm。

③頭部は革製品が覆い、無撚りの棉糸と見られる織物が伴うが消失。

(2)ムハンマド・スルタンの棺

ティムールの棺覆布と一致。ティムールと同時期にグリ・アミール廟に移されたのかもしれない。M・ゲラシモフ(M. M. Gerasimov)のスケッチには死装束断片が多く記録されている。

(3)ウルグベクの棺

①シャツ

織組織：平織り。

色：くすんだ茶色い糸の束であるがもとは黄色。

経糸径：0.150mm。

織密度：1 cm²に50本。緯糸はおそらく32本。

②ズボン

織組織：平織り。

色：脆くくすんだ緑色。

織密度：1 cm²に50本。緯糸はおそらく32本。

材質：緯糸はおそらく棉。

③ベルト

織組織：平織り。

文様：市松文様。インディゴと見られる緑色と黄色を確認。黄色には十字模様の1mmの細長い切れこみ。

織密度：1 cm²に84本。緯糸は50本。無撚絹。

高品質であり高い価値を持っていたと考えられる。結び目を作って腰に巻かれていた。

③その他：薄い高品質な平織りの、死装束と見られる茶色布、遺体包カバーと推測される青色布。青色布は1 cm²に13×33本。

(4)シャー・ルフの棺

ウルクベクの棺出土の青・茶色布と同じ。

(5)ミラン・シャーの棺

織物は未確認。

4. サマルカンド考古学研究所保管の織物調査結果

詳細に調査した結果、無地で絹製の縹子であることが分かった。織密度・糸径が均一であり、熟練した技術が窺える。経糸は2本一組のZ撚糸、緯糸は引き揃えの無撚りであり、織密度は経15本(/1cm)、緯14本(/1cm)、糸径は経0.2mm、緯0.6mmであった。

中間報告書と照合した結果、一致するものは見られなかったが、ティムールの棺覆布下部の単色平織物の経糸と緯糸を逆にすると数値がほぼ一致した。今後、コノノフの最終報告書の内容と照合する必要がある。

5. 考察

経糸はZ撚で丸みがあり、中央ユーラシアなどに多く見られる特徴がある一方、緯糸はまっすぐ引き揃えた無撚りの平たいリボン状を呈し中国的である。

縹子は中国・宋代に出現したと考えられており、文様縹子は元代に盛んに製作されたが、ダマスカス製のダマスク織でも縹子が織られたという指摘があるため、今後西アジア資料との比較も必要である。

アラビア文字をあしらう例は、10世紀頃からエジプト出土品、ヨーロッパの教会、14世紀頃から宗教画等にも見られ、ティムール朝においてもイスラームの影響を受けた染織文化が発達していたと考えられる。

1221年、ヘラートの織工がビシュバリクへ連行され織物製作に従事したが、1236～1239年に10～20%程がヘラートへ戻ったとされ、当地の染織文化はある程度復興したと考えられる。ビシュバリクに残った織工は1275年に大都に移され、東西の技術と文様とが合体した金欄「納失失」(ナシシ)を製作した。この時期に中央アジアの織物産地にも元朝の技法が伝わり、ティムール朝においてもそれが受け継がれたのではないだろうか。東西の特徴がみられる当該資料からは、元朝以来の絹製作技術を受け継ぎ発展させようとする、ティムール朝初期の染織文化の一端を見ることができのかもしれない。この後、サファビー朝でも金糸織物やタペストリーが盛んに製作され、海を渡り日本にももたらされることになる。

参考文献

小松久男ほか(編) 2005『中央ユーラシアを知る事典』東京：平凡社。

坂本和子 2008「金糸織物の発展——特に「納失失」について——」『古代オリエント博物館紀要』28、151-166頁。

Кононов, В. 1941. *Предварительный отчет по техническому исследованию тканей из погребений в Гюри-мире*, С. 1-11.

(北海道大学)